

復帰30年

不在の検証

15

上原 誠勇

復帰して三十年、本土なみ、同化、系列化、格差是正、自立、基地受け入れ、一國二制度と歩み続けているが、いつたい沖繩社会は何処へ行くつもりなのだろうか。

米兵による少女暴行事件をきっかけに起きた一九九五年の県民大会は、積年の怒りと叫びが噴出し、復帰後最も大きな県民的出来事だったと思う。日常は潜在化し姿を現さない沖縄人の「不満」と「屈辱感」が一気に吹き出したようであった。私は「75%11/100」のプラカードを掲げて大会に参加した。その後、その延長線上にあつ

た真知事の「代理署名拒否」問題は押す、押さないの問答の末

変わらない「貧しさ」 本格的な美術館活動を



植民地根性から抜け出す機会と民力を喪失させた。同時に、沖縄人のメンタリティーに大きな屈折と変化をもたらしたと言えよう。

多様化する美術表現

さて、そのような歴史経験のなか、沖繩の美術シーンと環境はどの様な変化を遂げたのだろうか。昨今の美術は内容と形態が多様化し、伝統的な絵画や彫刻から、物と空間、写真と映像、



に永田町の巧妙な政治手腕に屈した。優勢に進めながら千歳き



県民の美術への関心は高いが美術を取り巻く環境は厳しい
—浦添市体育館 (2002年の沖展の風景)

更にコンピュータを用いるなど、固定表現物から可動非物体の視覚表現装置化し、大きく表現の幅を広げている。領域が拡大したぶん今日の美術の状況は、見る側に伝わり難く、その社会的価値と役割が見え難くなっているのは確かであろう。しかし、美術表現は現在も有効であり、その歩みを止めることなく美術家たちは時代を表現し続けていく。

かつて米軍統治時代の画家たちは米兵相手に売りの絵を描きながら、戦争を体験した沖縄社会の苦悩、米軍統治下の現実、さらに民族の誇りと王朝文化の根底に流れる文化などを描いてきた。復帰後においても、画家は先達の流れを受け継ぎながら、同化と系列化のなかで、沖縄人のアイデンティティを求める

作風、伝統文化と風土、インフラ整備にとまらぬ自然破壊、戦争と鎮魂、変わらぬ居座る基地社会の痛みを表現してきた。更に現代の社会制度のはさまでゆるる共同体と個のありよう、物が溢れる消費社会とエコロジー、沖縄社会の現実と課題をさまざまなテーマで映し出すような幅広い表現活動が続けられて

いる。復帰後も多くの作家たちは、

復帰後も多くの作家たちは、

復帰後も多くの作家たちは、

復帰前の作家たちと同様に制作活動の拠点を沖縄において、発表の場を県内と中央(東京)に求め、多くの美術家が中央の各種美術団体の傘下に入っていた(わずかながら国外に発表の場を求める者やグループがあった)が、近年は県外をはじめ諸外国に活動拠点を定め、アジアや世界的視野から活動し、新たなまなざしを沖縄に向け、新風を吹き込む若手作家たちが現れてきていることは特筆すべきことである。視座を置き換えて自己を逆照射する彼らの本格的な美術活動は、未来の沖縄社会に大きな示唆を与えるに違いない。

一方、美術を受容する沖縄社会の美術環境はどうだろうか。歴史をかきこむ「沖展」や復帰後まもなく始まった県主催の「県展」など美術展も多い。また、現在は遊休化している「県民アートギャラリー」や昨年閉鎖した沖繩物産センター画廊、那覇市民ギャラリー、貧し画廊、企画画廊、喫茶画廊など、パブル期をピークに街には多くの画廊がオープンした。

最近では活気を失いつつあった那覇市の中心街で、街の再生をかけて若手の美術家達を中心に、前島アートセンターを

立ち上げた。復帰前に比べ美術家たちの発表の場は格段に増え、その需要を満たしている。しかし、美術を見る側、作品を向けられた側には、その活動に見合う環境が十分に整ったとは言い難い。美術表現の力を日常生活のなかで体感し、受容していく文化施設として、美術館活動が県民の生活から抜け落ちて

いる。

いる。

復帰後に浦添市美術館、読谷村美術館、佐喜真美術館など美術館が相次いで開館し、美術環境が整ったかのように見られることがある。しかし、収集と研究および体系化、内外との交流など、常設企画の美術館本来の十分な活動には届いていない。美術を通して自らの歴史や文化を検証し、言説化し、語り継ぐ施設として本格的な美術館としての活動はまだ存在していないといっている。そのことを思うと、観光立県の勇ましい声を聞くにつけ、むなしさ「貧しさ」を感じてしまふ。

そんな中で、私設の佐喜真美術館が明確な理念をコンセプトに活動が続けているのは注目している。貧しい美術環境の整備が県の文化行政によりいっそう求められる。

(画廊沖繩代表)

(画廊沖繩代表)

(画廊沖繩代表)

(画廊沖繩代表)

唐師子

う わったーん長命んち